

ヨシの髓から覗いたソ連(中)

—シベリア捕虜回想記—

宮川 政治

一一、九太小屋で開腹手術

シベリアに抑留されてから約一年が過ぎた真冬であった。バラダ(髭のこと)という綽名の炊事長の軍曹が、嘔吐、腹痛と共に数日間に亘って高熱が続いて、明らかに虫垂炎穿孔の限局性腹膜炎の状態であった。チタ市の病院に送って貰いたいとソ連側に再三頼んだが、糧秣輸送のトラックは四、五日先でないと来ないので仕方ないとけんもほろろである。寸刻を争う状態であったが、衛生関係者といえ、私の他に新任の軍医中尉と齒科軍医少尉、衛生下士官が二、三名いるだけで、外科医はいなかった。

しかし幸いにも、この大隊には病馬廠の者が多く、物好きな兵隊が馬の手術用医療器械をかなり持っていた上に、滅菌乾燥リパーゼや縫合針、糸等も相当量あった。馬用の手術器具でと自分自身も多少抵抗はあったが、ソ連のドクトルの許可を受け、偶然にも彼のところに一本あった無水アルコールを貰って、それを薄めて消毒用とし、天井から落ちる砂を防ぐために毛布を張り準備を整えた。

患者にとつて本当に幸いなのかどうかは、胸を張っては言えない様な馬用の手術用具はあったが、私にとつて不幸なことに自分自身には開腹手術の経験がなかった。しかし緊急時でもあり、ちよつと乱暴に思えたが、大学時代の外科学ポリクリを思い出し、軍陣医学の精神を体して馬用の大きなメスを握った。

型のごとく、これまた大きな鋏、コッヘル、ペアン等が道具の割には小さな手術創を窮屈そうに出入りし、切開止血しながら腹膜に達し開いた途端、パアーツと膿が出

てきた。直ちに清拭しながら上下二カ所にドレンガーゼを入れて順次縫合、手術は終わった。術後、サルファ剤等を工夫して投与すると二、三日で解熱した。術後四日目にトラックが来て、大分元気になったバラダ軍曹を送院することが出来た。

二カ月位してチタ市の司令部からソ連の軍医中佐が收容所の視察に来たが、「ドクトルマイヨール、オーチンハラシヨウ(軍医少佐よ、大変立派だったな)」と褒められ、ちよつと得意な気持であった。その時聞いた話では、バラダ軍曹は元気になって他の收容所に行ったとのことであった。

そこで、これは内緒の話なのであるが、手術に携わった医務室の数人で、匿しておいた三分の二以上残っていた無水アルコールを薄めて、こっそりバラダ軍曹のために祝杯を挙げたのである。この内緒のアルコールが格別の味をしていたの言うまでもないことである。

もしもバラダ軍曹に会うことが出来たら、こっそりとその傷口を見せてもらいたい。あの時は小さく切ったつもりであったが、なにしろ馬用の手術用具だったので、今見たならば結構大きく開いたのではなかったかと、ちよつと不安である。そして、その傷口を見て、今度はバラダ軍曹本人を入れて日本酒で乾杯したいものである。

一二、エツちな話

われわれの仲間に江淵君という下士官がいた。收容所の朝夕の点呼に全員が整列して、アルファベット順に書かれたロシア文字の名簿を当直の将校が読み上げるとき、殊更「ブ」のところにあくセントをつけて二、三度繰り返して、「エブツチ」と大声で呼んでクツクツ笑うのである。始めのうちには理解出来なかったが、それは男女の肉体関係を意味する言葉で、「エブツツアイヤマーチ」中国語の「マーラカピー」前のおふくろを：」という意味であった。

また、彼等が怒ると盛大に「イビツツア

イヤマーチ」を連発することがあった。その他「フルフル」という言葉がある。彼等がよくやる表現では、左手を握って脇腹に当てて左腕で輪を作り、右手を握ってその輪の中に入れて出したりして、「フルフルダワイ」と笑いながらやることもあった。とか、「ソレソレ」とか、「急げ」とか、相手をせき立てる意味に使われていた。

もう四十年も経ったので、名前を書いても失礼ににならないと思うが、収容所のソ連の将校にアナホースケという少尉がいた。彼は、収容所の中の簡易サウナ式（バーニア）の浴場によく入りに来たが、丸太小屋なのでコケの間の穴から中を覗くことが出来た。バーニア（浴場）番の軍曹が急いで知らせに来たので行つて見ると、なんと股間の一物が、腰掛け台の下、床の上でトグロを巻いているではないか。ロシア人は長いと聞いてはいたが、皆で吃驚してしまった。ただ白っぽくて皺が無いので、膨張率の方は不明である。

一三、シベリア狼に出遭った話

晩秋の午後であった。約十五キロ離れた部落で、収容所のソ連代理軍医（フェルシエル）少尉の愛人の工合が悪くなり、彼と一緒に往診したことがある。大した病気ではなく、色々と助言してお茶を御馳走になり帰途についた。収容所まで速歩でも三時間近くはかかり、途中で真暗になってしまった。森の中の細道を心細く歩きながら、あと三十分位の所に来た時、独特の狼の遠吠えが聞こえてきた。

少尉は、私に直ぐ後ろに続くように注意すると、十数本の枯れ枝を拾い集め、その二本にマッチで点火して私に持たせ、両手で回すように指示し、自分は拳銃を右手に大声で歌いながら小走りに歩いて行く。私も時々大声を出しながら左右に気を配り、懸命に後ろをついて行った。やがて木の間に青く光る狼の目が二、三匹見え隠れして遠く近く盛んに唸り声が聞こえ、狼の数は

次第に多くなってきた。夢中で枯れ枝の火を消さないように増やしなから、少尉の左手にも持たせた。

僅か一キロ位の間であったが、肝を冷やす思いであった。やがて収容所の明りが遠くに見え出し、森を抜け草原に出てホツとした。少尉もホツとしたらうと思うが、今度愛人の所へ行く時は、泊りがけか、夕方早々にきつと引き上げて来るに違いない。

一四、木こりの家に泊った話

山の中の伐採場で強制労働に従っていた時である。収容所に一番近い六キロほど離れたシャバルトイという部落から、伐採指導のため木こりの連中が来ていた。その中の一人の娘が収容所の所長（大尉）と仲が良くなり、所長はしばしば部落に泊りに行っていた。ロシア人はフリーセックスで、その点はオーブンであった。

ある冬の日の午後、所長が私を呼びに来た。彼女の従妹が病気で工合が悪く、往診して欲しいと言うのである。肩掛けバッグに必要な医療具と薬を入れて、所長と共にシャバルトイ部落に初めて出掛けた。腹痛下痢の症状であったが、あまり重症では無く、持つて行った注射と薬で丁寧に治療してあげた。終ると夕方五時過ぎで、すっかり暗くなり、所長が、今夜は泊って行くからマイヨール（少佐Ⅱ私のこと）も泊って行け、ということになり、夕食を御馳走になった。

彼等の主食は馬鈴薯で、肉を少し入れて塩と油で味付けしたスープを主体にし、黒パンと薄塩で古清けの酸っぱくなったキャベツの清物であった。それにチャイ・ス・マラコー（お茶と牛乳）に、サーハロ（砂糖）を入れて飲んだが、補虜の身にとつては大変な御馳走であった。

それからが大変であった。夜は、丸太小屋の一部屋で、両側の一段高くなった寝台様の所に娘と所長が、反対側に両親が寝た。私は、真中の床の上に毛布にくるまっ

て寝たが、真暗な中で両側で声を出して、男女の営みがゴソゴソと長く続き、そのうえ南京虫が一晩中襲いかかり、殆ど一睡も出来なかったのである。栄養失調気味とはいえ、若い私にとって、これは収容所には無い一種の拷問であった。

一五、ソ連の女性達

だいたいスラブ系のロシア人達は、男女ともに胸が厚い。日本人の場合は、胸廓の輪切りが横径は前後径より長く隋円形であるが、彼等の場合は、縦横が同じようであるが、角のとれた四角い感じで、如何にも格好が良い。

女性の場合、特に目につくことは、少女から娘時代には非常にスタイルが良く美しいのに、三十歳過ぎ、更に四十歳台になると、殆どの人が非常に肥満型となり、胸と腹、腰がズン胴で、大変不格好になることである。

婦人の労働者が多く、男に負けずに力仕事をやるが、木こりの女の、上膊の太さが体格の良い日本人の大腿部より太く、我々が二、三人掛りで転がすような丸太材を、一人で安々とやっけてのけるのには、皆、魂消てしまった。

一六、兎捕りは監視の目を避けて

シベリアでは、真冬でも雪はあまり積もらない。サラサラした雪で、積もっても二十センチ位である。さらに零下三十度にもなると、風も殆ど吹かなくなる。

伐採で山の中を歩き回っていると、所々で兎の足跡が見つかることがある。兎は、必ず一定の道を通る癖があり、また決して後ずさりせず、前へ前へと進む習性がある。足跡の新しいのを選んで、木と木の間が三、四十センチ位の所で、一メートル位の高さの横枝からワナを吊しておく。ワナは、ワイヤーロープをほどいた一本の針金で直径十五センチ位の輪を作り、それを針

金で吊して上端を下枝に固定したものである。兎は、頭と前足が輪の中に入り、胴の所で輪が締まり、苦しいので前へ前へと進み、胴締めになつて窒息死するのである。

ねらいを定めて数カ所設置すると、二、三日後には何匹かは掛かっている。コチコチの冷凍になつているのだから数日経つて取りに行つてもよいわけで、食糧不足の捕虜にとっては、大変な栄養となり、また御馳走であつた。

一七、魚釣り(ルイバラヴィツチ)

秋、冬、早春に伐採して、単位毎に積み上げた丸太材は、春になると、大型トレーラーに積み込み、十キロ以上運搬して、チタ市の方へ流れる河の支流の岸辺に下ろして、また積み上げるのである。

始めの頃は川は全く凍結しているが、やがて六月頃になると解け始め、次第に氷塊となつて流れてゆく。その頃から岸辺一杯に積み上げてある丸太を棒梃子で、川へ投げ込む流木作業が始まる。

七、八月頃の作業は気候も良く、あちこちに色々な草や木の実など、食べられるものが見つかり、そのうえ日本人は梃子扱いなどは器用なのでノルマの能率も上がり、捕虜達は比較的御機嫌である。

私も安全管理視察のために、流木作業について行ったことがある。驚いたことに捕虜達は、休憩時間にワイヤーロープの針金で釣針を作り、楊柳の枝に糸づけして、黒パンのかけらを練った餌で魚釣りをやっていた。十cm前後のヤマメが結構釣れていた。私も竿を借りて何匹か釣った。監視兵も一緒になつて、ルイバラヴィツチを楽しんでいた。釣った魚は、ソ連兵に取り上げられることも無く、作業員達の大切な蛋白質養源として腹の中に入つていった。

一八、組織内のソ連人

ソ連人の主力はスラブ系の所謂ロシア人

であるが、もともと多民族国家であるので他は約六十からの心数民族により構成されている。当時、一般的にスラブ系の一部を除いては、皆個人的には人が良く、割合に親しみ易かった。地方人といっても多くの人は流刑者の流れであり、誰もいない所ではスターリンの悪口を聞くこともあった。

しかし、組織の中の立場になると、全く人が変わったようになる。それは、政治部員（共産党員）の目に見えない網のような監視があり、密告によって自分が陥れられることがあるからである。従って、仲間のいる所では不平不満は嘸気にも出さず、また我々に対する態度も厳しかった。勿論、軍隊であるから、上からのプリカーズ（命令）は厳しく守るが、幹部達の最大関心事は、自分の成績で会った。

作業係の将校は、少しでも多く作業人員を出して、無理にでも労働を強化しようとする。一方、保健係のソ連のドクトルとしては、病人や死亡者を出すと自分の成績が悪くなる。そこで、その状況を承知して、日本の軍医の役割としては、ソ連のドクトルを煽りたり賺したり、上手に利用して立ち回り、少しでも我々日本人の安全と休息が得られるように努力することであった。

そのようにして、初めの伐採收容所における約二年の間に、気が狂って脱走を図り射殺された二名を除くと、なんとか死亡者を出さなかったことは、まことに幸いであると共に、その收容所の日本人側の軍医長であった私の立場として、誇り高いことと今でも自負しているのである。

一九、ノルマの盲点

ソ連には、「分配は仕事の量と質に応じて」「平等と均一は異なる」等の言葉がある。この共産主義の原則から割り出されたノルマが、どの仕事にも決められている。その種類は、筋肉労働と頭脳労働、その中にも高度の技術や（高級な仕事）、事務など多様である。労働時間も、仕事の種類によ

り差異があり、受け取る賃金、食糧等も、夫々比率が決められているようであった。

また筋肉労働では、体力を四階級に分けて、夫々の階級によって生産量のノルマが決められている。従って、よく働く人は生産量が一五〇%にもなり、働きの悪い人は七、八〇%になる。それに応じて夫々の支払いや分配を受けるということになる。

また一党独裁の国であるから、一握りの正式な共産党員でなければ、良い地位に就けない仕組になっている様である。一方、大多数の国民は、ノルマに縛られて浮き沈みしている。

一般に人間は元来怠け者で、欲得により働く者が多い。自由主義国家では、能力を生かし、身体を動かして、人の数倍もの働きをすれば、それだけ楽な生活が出来るという張り合いもある。

約四十年前の、それもシベリアでの捕虜からみた僅か数年の体験による感想であるが、木こりは木こり、農夫は農夫、一時的に少し骨を折って余分に働いても大したこと無く、それよりも適当に仕事を誤魔化して、ノルマらしくやっておけばそれで良いという考え方になるのでないか。その点、ソホーズとかコルホーズとか、理論や組織は上手に出来ているようでも、要は人間のやることである。最近、何年来かのソ連の農業生産の不振等も、そのような本質的な点に原因があるのかも知れないと思うのは、私の偏見なのであろうか。

二〇、共産主義の洗脳教育

チタ市周辺の收容所を、約二年間に四カ所を移動させられた後、私だけシベリア奥地のブカチャチャという炭坑收容所へ送られた。この收容所は、当初三千名位入所したが、始めの半年で約三分の一以上の日本人が、栄養失調と発疹チフス等で死亡したという悲惨な所であった。私が送られた昭和二十二年十月頃は、既に平常に戻っており、山の伐採場と違って一応電燈もあり、

食糧も少々良くなっていた。

ここには半年位いて更にハバロフスクへ送られたが、この少し前の頃から悪名高い「日本新聞」が各収容所に配布され、共産主義の洗脳教育が猛烈に行われるようになった。これは政治部員(共産党員)が陰で糸を引いて、収容所内の若い二等兵、一等兵などの中から、ダモイを餌に共産主義の速成教育をしてアクチーブ(民主グループ)を作り、日本新聞を発行。天皇制を強く批判し、共産主義を宣伝し、日本人同士の中で革命を起こさせようとするものであった。

収容所内では、旧軍隊組織は完全に破壊され、この民主グループが主導権を握り、連日連夜、共産主義の学習と「ガワリガワリ(アジテイション)」に狂奔した。新聞には歪曲された日本の国内事情と、誇大に表現されたソ連の世界的役割や、日本共産党の活躍等が連載され、これと平行してソ連共産党史の学習が強いられた。

また、「働かざる者は食うべからず」「分配は労働の量と質に応じて」「平等と均一とは異なる」「民主主義の旗手ソ同盟を強化することが世界平和への早道」「我等の祖国ソ同盟を強化せよ」「共産主義の尖兵となり帝国主義者の天皇島へ敵前上陸しよう」「我らの同志、徳田球一の下に、代々木の日本共産党へ結集しよう」「我等の偉大な指導者、スターリン大元帥万才」等々口々に大声で喚くのである。

更にエスカレートして、共産党史に出てくる言葉を利用し、「反動」とか「日和見主義者」と名指しで、集会等で「吊し上げ」をやるのである。この「吊し上げ」なるものが誠に大変で、この摘発を受けると、大衆の前で一段高い所に立たされ、皆の攻撃の罵声を浴びなければならなかった。

この状態は殆ど気狂いの集りのようになって、次第にその激しさが増すと、食事をしていける所にやって来て、更に「吊し上げ」を始めるので食事もとれなくなり、遂には「自己批判」をさせられる羽目となるのであった。この集団の中での狂気が、私

の思い出の中でも一番辛いものである。

(旧陸軍軍医学校二十三期生)

(横浜市保土ヶ谷区岩間町一ノ四ノ二)